

4 意見聴取会での意見発表概要

(3) 北部地区

日 時：平成19年1月21日（日）10:00～12:00

場 所：宮城県大崎合同庁舎 1階大会議室（大崎市古川旭四丁目1-1）

出席者：藤村 重文委員長

意見発表者：狩野 猛夫 氏

小野寺 征人委員

内藤 敏夫 氏

櫻井 弥生委員

遠藤 嘉和 氏

佐々木 悦子委員

氏家 規夫 氏

山田 光彦委員

石川 裕清 氏

佐々木 義昭委員

千葉 浩 氏

<概 要>

狩野猛夫氏

- ・ 旧松山町の行政の立場、松山高校の教育後援会会長として日頃感じていることを述べる。
- ・ 憲法では、教育を国民の義務として規定しているが、本来教育は学ぶ権利であると理解している。
- ・ 高校進学は、生徒からすれば学ぶ権利の行使であり、主権者たる生徒の権利は十分に尊重されるべきで、入試に関する規制は、可能な限り緩和すべきである。
- ・ 答申についての説明があったが、県民意識調査の結果で、高校選択に当たっては、生徒の希望を尊重すべきと考える中学生の割合が6割、拡大・撤廃等の見直しが必要との意見が全体の3分の2を占めている。3%枠導入から5年を経過した今日、さらに見直しが必要との意見があることは、生徒の学校選択の自由が十分に確保されていないことの証左であり、早急に是正すべきである。
- ・ 松山高校の家政科は県下の狭き門となっている。これは専門学科で学んで資格取得を目指す者、氏家監督の下で野球で汗を流したい者が志願した結果である。その一方で、普通科の志願者が定数に満たない現状がある。松山高校で野球をやりたい生徒にとっては、家政科の狭き門に挑戦しなければならない苦闘がある。また、ある子は、松山中学校に転校し、翌年卒業して松山高校の普通科に入っている例がある。
- ・ 夢大きい子どもたちに普通科の門戸を開放することは大きな福音になるとともに、家政科の中で資格取得を目指す生徒にとっても狭き門が緩和されることになる。
- ・ 松山中学校卒業後の進路状況として、有名大を目指す生徒を見た場合、仙台三高理数科、古川学園の狭き門の中で苦闘している。
- ・ 最近多くの生徒は、勉学やスポーツの夢を私学に求めているのが現状である。
- ・ まちづくりの中の要望で、学区制を廃止してほしいとの意見があった。
- ・ 特定地区や学校への志願者の集中、学校間格差の助長が懸念されるとの話があるが、影響は軽微であると理解している。
- ・ 現在の通学区域は撤廃し、生徒の学校選択の自由を拡大するとした答申に賛成する。

内藤敏夫氏

- ・ 知り合いの小中学生を持つ親御さんの中には、普通高校に入った生徒が全員大学進学を希望しているわけではない、進学や就職など多様な進路希望に対して丁寧に対応できる高校であってほしい、同じ市内でもバス路線がないために通うのが大変という意見を持っている人がおり、各家庭で連携して子どもを送迎している実態がある。これらは、学区を論ずる前に環境を整えてほしいということではないか。

- ・ 全県一学区になった場合について、今のルールでも仙台圏に通学している生徒がおり、進路先の選択は子どもの意見を尊重したいが、経済的に厳しい家庭は選択肢が限られるとの保護者の意見がある。
- ・ 中学校の先生からは、保護者に全県の高校情報を提供できるか心配との意見があり、先生方が高校に行って情報収集するための旅費や人的配置についても配慮すべきである。
- ・ 答申では、時代とともに交通の利便性は向上したとの表現があるが、何を以て判断しているのかわからない。
- ・ 意識調査の対象となったのが、旧古川市と石越町であり、この地域は比較的交通の便がよい地域である。このことが遠距離通学についての考えに影響を及ぼしてはいないだろうか考える。
- ・ 答申で「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正について触れているが、国会の附帯決議を載せていない。
- ・ できれば近くの高校に通わせたい、地域の普通高校には多様なニーズに答えられるような高校であってほしいというのが親御さんの意識であり、学区内における交通網の整備について県教委からの配慮もお願いしたい。
- ・ 地方の拠点と仙台を結ぶ路線は充実してきたが、地方間を結ぶバス路線は衰退の一途である。仮に答申をもとに制度変更する場合には、審議会が指摘した懸念事項を払拭するための方策を示し、時間をかけて地域の意向を汲み取るべきであり、その上で学区についての結論を出してほしい。

遠藤嘉和氏

- ・ 学区撤廃について様々な疑問がある。なぜ、今撤廃しなければならないのか、その目的は何なのか分からない。
- ・ 学区撤廃によって選択の自由を行使できるのは、経済的に恵まれた人のみであり、こうした人だけの選択の自由は本当の自由とは言えない。
- ・ 普通科に学区があるのは、他の学区に行かなくても同じような学校が必ず設定されているからである。内容的に選択の自由はすべての学区の中学生に保障されているのにも関わらず、それを撤廃してまで制度を変えたいというのは、他に特別の問題があるためなのか。地方から中央にもっと集めたいのか。
- ・ 経済と同じように仙台と郡部の格差を増大させてよいのか疑問である。
- ・ 経済的に恵まれた一部の人の選択の自由の保障と県全体の中高生の将来を比べて考えた時、どちらの道を進むべきかは明らかである。
- ・ 日本の社会は格差社会に変容しつつあると言われ、中でも格差の固定化が問題と言われているが、学区の撤廃が教育における格差の固定化の問題を解決するのだろうか。中央と地方の格差、経済力により教育を受ける機会の格差は縮小するどころか拡大するばかりである。
- ・ 一部の人の選択の自由の保障よりも、広がる全体の格差を少しでも歯止めをかけ、解消すべきである。
- ・ 市場経済の原理を教育に持ち込んではいけない。
- ・ 教育のグローバル化は素晴らしいことだが、日本では高校までが今や義務教育である。高校中退や中卒者が今の社会でどれだけ冷遇されているかわからない人はいない。教育の最低条件は高校卒業である。
高校は実質的に義務教育化しており、子どもたちを市場経済の自由競争の中に放り出すことによって、どんな時代になるかわかりきっている。現在の学区の線がぎりぎりである。そもそも自由競争の嵐から子どもを守るために学区を設定したきたはずである。
- ・ ある人は、教育においても自由に競争することによって学力は向上するはずだと言うが、仮に学区撤廃で全県一学区にすれば、中高生の学力が向上するのか疑問である。

- ・ 学力の向上を制度以外のところで可能にするのは、学校や教師、生徒自身、保護者、地域、行政などの総合的な努力であり、その効果を上げるためには、制度のあと押しが不可欠である。
- ・ 生徒の家庭での学習時間は2極化しており、家庭学習の2極化は、学習意欲の2極化であり、学力の2極化にもなっている。
- ・ 上位層は、家族の手厚い支援を受け、選ばれた生徒だから教師の熱心な指導がなされるが、下位層の生徒にとって、全県一学区制が、改善してくれるとは到底思えない。私の勤めている高校で下位層から著しく成績の伸びた生徒がいるが、これは、むしろ少人数学級のおかげである。
- ・ 古川黎明の高い倍率、遠距離通学、競争の低年齢化を見れば、高校の場合はどうなるか明らかである。
- ・ 今、皮肉にも学校評価がたけなわで、高校は生き残りをかけて奮闘努力しているが、生徒の集まらない学校はなくなってしまふ。一見合理的で、恐ろしい制度である。
- ・ 教育環境に市場原理を持ち込むのは危険である。同じ仲間同士が競争相手ではたまったものではない。生徒や学校や地域が共存共栄できる制度と政策こそ我々が目指すべき方向であり、そうすれば全体の学力も上がる。

氏家規夫氏

- ・ 生徒募集時の問題点として、松山高校の野球部を希望して入学してくる生徒の多くは、普通科に入って大学に進学したいと考えているが、学区制があるために普通科ではなく、家政科を受験せざるを得ない。
- ・ したがって、仕方なく別の学校を受験することとなり、思うように生徒が取れない状況にある。私が私学に勤務していたときは、学区制がないので自由に県下から生徒を集めることができた。
- ・ 学区が撤廃されれば、松山高校野球部を希望する生徒は、全員受験することができ、家政科には本来目的とする生徒が入れるようになる。
- ・ 松山高校にお世話になるとき、校長から松山高校の将来について、家政科と野球部を柱とした特色ある学校づくりをしたいと言われた。
- ・ 今は普通科と家政科のバランスが崩れており、早急に学区制を撤廃し、生徒が希望する自由な選択によって普通科を受験できるよう要望する。
- ・ 野球部の生徒は、地元の寮に入っており、地域の人とあいさつ、清掃、奉仕活動等地域との関わりがあり、その結果、地域も応援してくれている。
- ・ 夢は、地域や学校と協力しながら松山高校野球部を甲子園に出場させることである。厳しい練習を通して生徒の人格形成に寄与していきたい。
- ・ 地方の学校が特色ある学校づくりを目指すとき、広く県内全域から生徒が集まることで、その目的が実現できる。
- ・ 人口の少ない地方の学校が個性的で特色ある高校づくりを行うには、学区制は大きな障害となっている。学校の特色が大いに発揮できれば、生徒がさらに増え、それに関わる交流が増え、地域の活性化に結びつくのではないかと思う。
- ・ 地方高校の生き残りや地方の活性化のためにも一刻も早く学区制を撤廃すべきである。

石川裕清氏

- ・ 学区撤廃することは、今でも高倍率の仙台圏の高校の競争を激化させ、学校の序列化を全県規模で推し進め、学校間格差を拡大、固定化していくことにつながる。
- ・ 世間から学力が低いと見られている学校に入学してくる生徒の挫折感には相当のものがある。別の学校

に入りたかったが、ここしか入れる高校がなかったから仕方なく入学したという生徒などがおり、我々教職員は、こういう生徒に真剣に向き合いながら毎日の教育活動を積み重ねている。

- ・ 今、一定の学区があってこの状況である。学区がなくなったら全県規模で序列化が進み、一層厳しくなる受験競争で、生徒たちの受ける心の傷は、計り知れなく深いものになる。不登校、いじめなどのマイナス現象は一層深刻になるのではないかと考える。
- ・ 賛成意見には競争があってこそ学力が向上し、学校も活性化するという考えが根本にあるようだが、低学力の生徒は、基礎的な部分が立ち遅れており、一見無気力であるが、教師の働きかけによって学ぶことの面白さに一旦目覚めると見事に学びを取り戻していく。
- ・ 受験競争を前提とした競争的な学びは、自分たちの駄目さ加減を思い知らされ、自分に見切りをつけることにしかならなかった。学習嫌い、学校嫌いにつながるものだ。
- ・ 学力の低下が社会問題になっているが、学習嫌いの方が深刻である。
- ・ 有名大に現役で入るような生徒の中にも、学問に興味を失い、学問から逃避し、大学に入ることがゴールになっている者がおり、大学に何人入ったからといって喜んでいる場合ではない。
- ・ 真の学力向上は、競争によって駆り立てられるものではなく、自身の向学心に働きかけることなしにはあり得ない。
- ・ 本来高校は、自然や社会の仕組みについて考えさせ、人間の生き方について考えさせ、民主主義社会の担い手として必要な協働する力を身に付けさせる場所であったはずだが、目に見える成果だけを追い求めているのが現在の学校の姿である。
- ・ 生徒たちの学力を向上させ、学校の活性化をもたらすのは、機会均等、平等教育の追及である。
- ・ 登米市議会でも学区撤廃の意見書が出されており、地域の声を聴き、県民的な議論を尽くした上で、慎重な判断をお願いしたいとしている。
- ・ 制度の改正は、一部の利益ではなく、大多数に及ぼす影響を考えて決めなければならないということを踏まえ、適正な学区の維持をお願いしたい。

千葉浩氏

- ・ 高校進学率が98.5%となっており、これにより子どもがいかに学校を選べるか、自分の能力を生かせるかということを大事にすべきである。
- ・ 自分自身、高校進学時、学区制があったために、希望校を断念せざるを得なかったので学区制は撤廃すべきである。

<質 疑>

櫻井弥生委員

学区撤廃に反対の方からは、遠距離通学が増えるのではないかと、親の経済力で格差が生じるのではないかと意見があるが、松山高校の場合は問題が生じていないか。

氏家規夫氏

仙台から来ている子どもは、親の負担で寮に入っている。経済的な面で大きな問題はないが、若干(寮費等の費用の納入が)遅れたりするようなことはある。

狩野猛夫氏

経済的理由で行きたくても行けない子どもがいるというようなことは、学区撤廃により生じる問題ではない。進学について、子どもと親がいかに一つの結論を出すかという問題であって、学区撤廃があるか

ら遠距離通学しなければならないというわけではない。

学区が撤廃されると、すべての子どもたちが、ある特定の地区に集中するとは理解していない。

また、松山の場合、農家の方々が相当の量の米を集めて地域のみんなで松山高校を後援していることも参考にしてほしい。

山田光彦委員

野球部のメンバーで家政科と普通科に入っている生徒の割合はどの程度か。地域住民との連携の具体的な事例、行政の協力体制は具体的にあるか伺いたい。

氏家規夫氏

地域の方からは野菜とか米とかいいただいたり、行政的には、優先的に市営球場を使わせてもらっている。

家政科と普通科の部員の割合は、概ね同程度である。

佐々木悦子委員

反対意見の多くに地域が空洞化しているという意見がある。狩野さんから町づくりの観点から、学区を撤廃してほしいとの要望があるとの発言があったがどういうことか。

狩野猛夫氏

定住希望者が子どもの進学に関して、学区の問題があったためにできなかったことや、松山駅前の宅地造成販売の中で、学区制があるために売れなかったことがある。

行政としては、仙台市への一極集中は、県内の各市町村の行政としても大きな課題である。そのすべてが学区制の問題ではないが、まちづくりの観点からすれば学区制の問題は、一つ 二つの少数意見として看過できる問題ではない。

小野寺征人委員

反対の立場の方に伺いたいですが、3%枠の設定が最も望ましいと考えているのか。あるいは現在の学区制の改善点は何か。

遠藤嘉和氏

現在の制度の維持を前提に考えている。

高校の見た目の設備が魅力がなく、老朽化しており、学区制よりも、施設、設備などの充実を図るべき。

石川裕清氏

現場の立場からすれば、学校は生徒がいて先生がいるのが基本である。その上で教員が生徒の指導に直接関わる条件整備をしてほしい。

特色づくりと盛んに言われるが、何が特色なのか分からない。どこまでも生徒を見捨てないという意味では誰にも負けない。

学区の理想は、小中と同じように最小限で地域の人間が地域の学校に入り、そこでどんなニーズにも対応できるべきである。そのためにも教員を増やすべきである。

櫻井弥生委員

自由に行きたい学校に行けなかったとのことだが、3%枠についてどう考えているか。

千葉浩氏

私は、3%枠以前の生徒で、行きたい学校に行けなかった弊害があった。当時の担任から地元の高校を勧められた。

佐々木悦子委員

千葉さんが本当に言いたかったことは何か。

千葉浩氏

高校は義務教育ではない。学校を選べる自由を生徒に与えるべきである。

学区間のレベルの差がつきすぎている。全国でも低い宮城県の学力の中で、栗原はもっと低い。これを是正するためには、学区を撤廃すべきである。

佐々木悦子委員

一人一人に時間をかけると教育の意欲が沸くとの例を発言されたが、学区制がそのままとすると、学力も希望も違う子どもを一緒に対応することとなり、その方が逆に対応が難しくはないのか。

石川裕清氏

そう思わない。学力幅があるのは、当たり前である。小中学校では当たり前に行っており、高校でも同じことである。しかし、40人を一人で見るといわれても困難なので、半分くらいにしてほしい。一人一人に対応するのが教育である。

小野寺征人委員

自宅から通学して進路希望を実現するのはよいことだが、様々な事情で学区外に通学する生徒もいる。自宅から通学できるような環境をつくためには何が必要か。

内藤敏夫氏

公共交通機関があれば様々な選択ができるが、新幹線があってもその駅まで行く交通手段がないために親が駅まで送迎しているのがほとんどではないだろうか。高校選択の際に自分が通えるかどうかという要素が心理的に働くのではないか。

近くの高校だと有り難い、さらに、多様なニーズに対応できる高校であつたら有り難いというのが親御さんたちの率直な意見と理解している。

山田光彦委員

学区撤廃による一極集中の懸念は軽微との意見があつたがその根拠はどうか。

狩野猛夫氏

答申の中でも出ているが、仙台地区での競争激化が懸念されているが、既に3%の枠の中で仙台に集中しているものの、100%にはなっていない。全国の状況でもさほど心配する必要はないと書いてあり、そのように理解している。

子どもたちが私学に夢を託さなければならないという現実を、子どもたちの声なき声として受け止めるべきである。

藤村重文委員長

反対意見の方に伺いたい。学区撤廃により子どもたちの学校選択の機会が拡大するとの意見についてどう思うか。

石川裕清氏

輪切りといわれる学校の序列化が行われ、それが現実になっている。それが今よりひどくなり、無用の劣等感、優越感を意識させることになる。そのためにも地元にしっかりした高校をつくっていかねばならない。

<傍聴者からの意見>

一般傍聴者

松山高校の氏家さんの立場ならむしろ1学級増やすべきと主張すべきではないかと思う。そういう考え方で進めてほしい。